KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

2913
2
昭和九年七月六日

貞操婦女八賢誌 初編中

東都 狂訓亭主人編次

第三回

黒白親族毒婦怨荘官
告婚情老婆説七女

さるべき神宮屋平左衛門を荘官至兵衛が酒宴の席衆人の進そ
駄さ〜〜無念やるかたなきも里人九分八梅太郎とりのきこ
まとひくのまもとられぬごとく〜とく我家へ帰り
やうで知辺ひさもいぶり〜げ小平左衛門とうち詠め
ちとのぐこぐこのもも上髪も乱まてく顔色とりひ合点のの喧嘩でも

[illegible]

[illegible]

[illegible]

南も梅さま御ゞ方へ参り給へ申上げまゐらせ候へ
とまでもうまうまうあるる様子にて
申家様続きの血縁のことを正さかけまゐらせ
いやゞ私ハ伯母梅さまこそ
おかヒハ仲人何アノ後家にやきまてくるものつ昼日中にたよりをつけて
おもまう龍女でもあろ神宮とうふ名氏をあげるまゐらせ
まくもまて男らしくもうい意を摩ぐ者もいと理屈を言ふ者のごと
縁をにつく他出さいの所様実の妹が続く居く他人よりまこれ非
点をうまくまくうるものもモウ〳〵私ハ
そんなこと様まるとんゝ

うるく〳〵痛くも様つまもう者まん
きまこにモウ〳〵不吉かてご者ごうのふ出拵ることいふがるのもと
智あり様ふ者ぐりそいとうたのりまる他見ぐ者まる
おうまが如き様まうふとうしまうふぐきたる女ものまる男まる
業まはさいぐふ様ふぐるきまぐ何変も知まるいふまる
ぐにて慎ま用ある者いさ彼おふふ歌のあるふ様いとも
待まびく鶏のうまふと猪芋ふきまくゆまふ上湯と様と物見拵
に行ぐまくさもまで安ふ様ひく字十支の上様こるぎの様のさぐるま額
の鏡をまのの白体より延いまる様をまふ人尻をまぐ下女と丁雅を供ま

法師一所ゐたらぬぎり〜筆の軸編の遠表あく匂絣法師の
道兵衛裏おごめり〜て主殿〜を浅〜しくもあり〜けをかく〜梅を
あゐ紬文のたびをそぐんと廣言をひ〜ふぜ風情をもみる
うと平左衛門を召待〜く樂かり〜ぎや者ぞく〜て酒り暮るふ
ゐれすく〜ことぞくん道上〜彩ゐ白紬のちぎ〜張見せる屋化粧をげく今
さう面目も淫殿〜そうゐ面ふら〜見せそうゐ文硯〜ゐ代〜ワ
おそ〜きゐのゐ酒りとさぐめきそ〜るゐいさゐも耳ふゐ〜ゐ〜ど幸たいゐね光
う〜癖の機姫ゐ〜笑ぞをねぎり〜唾のぞくぐ〜と〜ゐく裏ゐく平左
衛門を主殿人一所ゐ笑の加ゐ婿ゐき〜ゐ〜ゐんぞ酒り〜ぎ卑かゐ〜とゐど

頼ゐ〜ゐ返事ゐも女ぞ下女と下雅成傍人ゐ追ゐり男ゐ接〜ゐく芳ゐり
と投前〜ゐるゐ〜ゐ風情素ぞゐ〜ゐけゐ〜ゐ平左衛門〜ナゼ主殿ゐ元
き素のねゐ〜彩ゐ〜て張るのぞマアゐ云物でゐも素ゐく〜ゐ〜ゐと〜ゐか〜中ゐ
ぞ所ぞゐ紙〜モシ大変ぞョゐゐ〜ゐく〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ
ゐ〜ゐも〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ

かてぐさ　おもてうんえん
世を形出流文何でもこの宅よ様く京の門てふ京のみ事しのものを
のこ　うわ　ひろ　ひろ
残らぬ梅の母親が拾くわまもヨ　平ナラく　そりやアマア大変ぞ
ごけ　えん　いろ　ね　ふこ
ものぞ　実ってこまろてこりけどそーてマア後家ふ何とろく居ヨ　ナ二
えん
何ともいひへこの方のが山通りの書付もどざいまはとふまてろうもても
この　こきつの
ぎうりとそーて　ひろうとすると　ヒどいのふ　伺も今ことは知らく物をふ
く　さぐ　ぶ　ぶ
寺もヨのがまさうの河ぶうろーておりしひやーまんがつまゃぞを山
ら　えんぐん　りんけ　りんけ　ま　ぶ
方の勘兵で平家へ平家で拾ひくぶことふよりまびとのふはぶりへ見非く
ぶ　いぶど　りぶうん　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
結終へこ出をて皆をこまアふ赤座屋敷でも源を坊主の悪ふの
ぶぐ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
源こうんぞが後と押うう今ゆも知りく知まるうも知まこのョモウく

ふーこもうやち　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ

口入茎婆
ヒ女をすゝめて
梅太郎を養
子にもむ

ざ　ま

[illegible]

[illegible]

表平左衛門よ[illegible]

[illegible]

[illegible]

十八ばかりの娘さん〜ごぜうでございまするが「ヲヤ伺と上
「イエサ外のことでございませんがこちらの婦さんをひとくりでる家が
ありまするぞ出来ると直に参りまさるが」「ヤ
いふてふ先さまでも出来る程の家柄の子孫出源居さまをやすこしも出
不自由させず十さるのと社作りて永年以ふりまさるまでおちらの出嫁
さるとと直に出うんまるのもあるさるとヤ以ことでございまして縁に出門縁で
ごぜの中まで〜〜どうぞ世話をヤ〜この「そまでへく出
切にモウ ありがとうもちろ〜出来るのとありのいさごぜの中へモウ他人の中へ
まるで〜く半日も居ることでごぜの中ません殊にどうも他の家柄縁せて

やうなもの
立人亭主に遺言せ〜ものもあるまり〜く表まるふぞうも「ヤ
ふそまでぞるねと社作りけるまるべさまの姫出来こちら〜嫁よりもひ
あるまでてふこるうごぜのやまもち「ヲホ〜〜おださんと〜さてぶ婦来マア何戈
ごとふ出ひご改年やうく十戈ろ〜ろのの来嫁どそうでもごぜの
まもまの今ものを作るに来ふとふりふぶち藻でっこざのおろ〜さんざのと
いろく女のてもとおんでまるぐとのあげくるは大坐来サ。やと若気の亭主
とのやはりのとのくぶふてちらでいやあおろ〜さんご甚子坊ろのおろ〜さん
ふそでめてんてあ何のとこ〜〜く注中〜笑ふ中〜大さるぶモウ〜ぞう
〜〜さりやりちちはわさまさせん作のおるはモウ十戈にもるるとふ〜〜を

[illegible]

くマアその通りに仕作て下さる先さきの人でございますエ　イヤ実
さ山方とのゞまぬ中アノ神宮屋さんでございますヨヤ〳〵そま
ヤアどう〳〵て山方と数同士のやうにちやんくでござるそうぢう〳〵　イ
エ〳〵そまどもかさのる遠く今ゞやアこちら様のやうふ矢事に
おのつくお出のさまよりてアヤ〳〵てもいとりでいろ〳〵出義紙もでござい
ますまいぢてう〳〵中せばマアあなたはでございますと成とす多う
に入たその道〳〵成彩んざる彼神宮屋のいちやくが問ひ若う兎ら
知るやどもまゞ門その中成ゆんとく思ひぞ結成すゆ法く嬉ホいく成う

つゞき
紙巻も先相ぶりとなえれるおもてくの物の中に記載
ぐく吉ものやくしく結のつるよりもまるる仕ろさも麻ホるとも巻一
マアあなたくとくしく所がらおいてござのあるそうろうろ
もでございますそうがまぢ神宮屋のお門宮が紙作天八年位家の
れるまくさんぢ。ぢやくお出ますて洲門紙屋ぬ八人巻の着の吉ぢよう
よくぢんぢう
翌日源さん坊さんがでぢんく節もまんざう義法なのいさんとーさうのぢ
でぢやさんとさいうぢやくのと思のくぢうぢよく実紙作くまくぢ
さのとのと世に縦紙ますぢと思の
が結合くすまさ二件ぢアいさまくさもるのコレエおまるぢ今ゞやア節と

まるめて居るうちに又面白い神宮とのの
名聞家元流の達者なるうつはものとて
ゆんでもきりにおまへさんの方へ
うつりアヤーまつのゞきりとーこうとやそこもあつてうりに
置ものとてございますとサそこまでつまつて他人が中に成
味方の極ふかーてございつぶ隠く極まりこうに人まで
とのふ出門家のいつてきたり門ゑとろで去年不動さまのお神酒の
いざこざのるさのがかりく物怪の音ひとやう桃古の書物を
さんの方にあつく見まで正統の男のある朋友あらうふ組中もあつく合

年ふ十一月孫さんこんいつきーせるをいつきーこんいつ仕合せがよかつたーこう
ーまをを花も蘭もさいたるぐくマア浜梅ーくちやくいでまちくを
ゞうあやまりくすもこ同系こんーまこのの表向ぐ他さる紙彩ん
でんまこるる遠ひの雑よでもこまこんーこ不和をまるくやうあ理
そうあつくも考ひのーこと被見出仏能をるこまくここーのやうあ
数ありまやせん着紙ち彩こるこまこうけでございちこどうぞこるちでのこと
も何もかもあつくあこんと出源組紙こまこまこ紙絵あのちみのち為何
で車のるこども家の出繁昌を思ーこくよくこのこ紙こまこまこーと
過誠ろこまこぐくあこくと蛇丸ーこる秋吉にまごひんせひど紙このち為

差少不宜の妻の中に是ものこと知を強くしても皆く他人の面来り
ゝのことを梅太郎が女のうぐいすとの不ことを成明しく新みさうとせんと
思ひつきやうがまそもぐ〜笑の中に刃をかくし真綿に針の立ある妻の
人情ふたり親〜と思書を宮あるくお藁にむかひ〳〵まことをそういかに
ぶのようりのお嬢〜のうまけどけまどこまをあく荘宮さんや源三さんも
お世話もあり代のおうげで八九年自然延〜に梅太郎〜一度でお
通事も出来ませんいづれおつくさんのお志のとうをべくもさ梅中
言伝まうくまくまくま

世話親とその身にありて八歳ばかりなるこども梅を郎孝行の例成
ことなれば看病のいとまにいづる庭面の花も母への乳ぐさわと木のぐりを
きく一枝の挑成を折りて皇帝ちゑ物語ちゑ比ハ笑つけ〳〵梅ぐうえ
怪我をきそへ〳〵ものいヨ何とも申ひくべうしとのぐ術なや指出ハモウよ
ヨ〳〵アイナニ母をいさ〳〵ハきませんよわんやり桃の花ぐよく咲こうう母人さぶ
又世ようと思ひ出くツイおうう花ハけまでと永類も何もよこべハきませんヨと
はくちヒハ約せまう思ひ出成ちうく〳〵ハ心の中に思ひ出ゆうかてこそ
けまでご此ちとうい生立成史の存生見さうぐさこそ悦びのことうこんに人並より
そうハ〳〵くそこ別そのこに花業をさ祝く立綿の男子人同法くうう形

相ふ申まこく今ハ児ハ男童の苦心とてちねこそのみ
思ふくうこ成法ちうきあ行成ちうく太刀片刀薙刀の小懸を縫
ヨ〳〵ものと推べ〳〵拾ひハ成ふ申まこうる元を顕ハヒ自然の理ちこのふ
ものいつまでも男の姿でハかるべきこそこれとともに此母ハ存命ぐ元ハ友
の大病一安の見ふ迎ぐくとハ切りもせまのが姫ハ知る血縁の母ハ歌
ちる 立も辺成ちまこね看病ハ大人もちうこそ成抱の男子ちまこ門〳〵出く友
達成とわこびでもまるうと思ハ咲花ハ知成つけて母のこと子ちまこ成ぐ
いいこもせ話ちも歌ちうこ〳〵ちまこ成と申〳〵も親ふ若成ちまこ風
情もあこくいぢう〳〵ちと注まこ母の枝元〳〵母人さんこまこ見ちんちに

さきに咲キテ　ヨチョッとあるとしのうまれてもさとぶ涙ぐまれ　親を
覗いく梅を弟　母人さんまたんとうるいく人といひあうぐうち湯茶こく
温ゝ　煮菜茶碗にうけて　アイあつうさんお菜サア我慢してなよ　ヨ。
母人さん私が来うう落さまぐ動音がおこ門さのうへうるへと成　モウ
今度うういづうもせど静にうるうう拙悪してなまヨサアお菜ぐさめるから
お上りヨト母の背中を撫ぐゝ菜茶碗をさー　ワアウトは
ゆる祝の祝きに門ゝ　甚ものもいぶ注却　ヨウ母人さんかん弟
ヨウ　私ごろのうわやまるヨ。モウ花も伝めも打ヨのうう拙悪しう茶を
よくしてさんきこヨウとうをと上てう梅を弟　お上ハ引寄抱　何の

ごうごうろうろうコレサ　注ぎと撫姫成ものあ　ゝまでも　ゝ注ぎ
の成　モウ　ゝ　ゝ注ぎのヨ　ゝ　ゝ　ゝ
ヨサア　お菜でもどく　拝びみト　ゝまでしやアおまへもモウ来ろ
ろくゝ　ゝのゝ　ゝろくゝ　ゝのゝ　ゝ
ゝるうう　姫　涙ぐこぐきこヨトゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　梅を弟の頬ゝ　ゝ注ぎとゝ奥蓋を　ゝ
もうゝのゝうに　ゝ文ゝの母ゝ　ゝ十年以来何ゝ
がせる拝びもさぞ男　ゝ来音ゝ　ゝ彼歩きの遠ゝ　ゝ父さんゝ
ゝ師匠で奥様のお例仕も出来ゝ　ゝ

ムトヤウ
不自由ゲラウ〜〜ナ事ヨリ〜〜ナ事ノ持扱ビノ邪ノ糸サヘ
此合セ二枚糸 抽 「アイヲ〜〜ハ言マセン私サヘノ下ヘ言マヲ〜〜ヨ
ヲ言ヘ〜〜ソウ〜〜ナ子ドモノ中ハ丹念ヲノハ始終魔ガ出ヒマセ チヤウト
何ヲヲ言ビヤウ〜〜ナ事ヲ言ハセナ言ヒヤウ〜〜ト言ヒヲ言ヒ言ヒ言ヒ

いと貴いの何ぞういふことなるものも和さまこのものをまでこそいつの花沢の
軍の河中村重頼とのふ人が若武者の前に立て巨田道濃さ為に見
みなこそ〇かゝる河さてこそ今のそこ〳〵やうのもてなきみと思へ知ぐ〳〵ト
旅なくまてことのふ語をもこそ〳〵もてこゝる大物が集こそ〳〵居
こでこそ〳〵アそのこと和も南もでん〳〵罪に元河へぜひ死ぬめ
よくでそなるいと和くまごつきまを今もそのこで来こそ落さと
いこの武士くこそ〳〵物差一私ぐ死んざこそまこを来こそ落さこそ
猫より和さこそ〳〵あくこそ〳〵こそこと思ものやこそ〳〵こそ〳〵
和こそのこも後のこそよくく罪もこそ〳〵こまこんなアレアノ仏さのトの

黒の箱を持くこそ〳〵アイト延喜八こそ〳〵も力こそ〳〵柿こそ和ぐ元
〳〵こそ〳〵小文庫の中探こそ〳〵大切の書物残らぜこそ〳〵こよ
言こそこの出付が有こそ〳〵去年よりこそ〳〵色こと色紙こそ〳〵
柿こそ和ぐ元こそ〳〵ぜんとのひこそ〳〵こそ〳〵より河元の後こそ実の知こそ〳〵
のこそ〳〵ぜひ遠成親ひ祇古の品をこそ〳〵こそ〳〵知こそ〳〵
みまで文上と同じ血脈の人こそ〳〵甚方の為こそ〳〵縁の伯母藤器こそ〳〵
石こそ〳〵ぜと思ぶ山ぜど隔こそ〳〵和敷こそ〳〵もうち解ぐこの伯母
江の底こそ〳〵のこそ〳〵神宮寺の郎紙生方こそ〳〵継こそ〳〵町郎に一生こそ
そこそ垂こそ〳〵こそ〳〵文さんのひにこそ〳〵ぜこそ〳〵の遺言こそ〳〵この書こそ〳〵今こそ〳〵

慈母
遺訓
後事
清吉双紙

成人しく人五くよ業とそび自うしく得分もべし若は母ゞ亡後に
てこ三位年紀五位よ人絢毋出ふその身をもまもるそとも京荘宮う源三どの
恩業よ高く成長し乞をさでるく父上の名跡清ゆんと思のうべ金瘡
の妙薬と知つくも得弱き「ヘイサラバサラ」この良薬異ほより洞まを
しるき血止の即効周防のその大内家ふ勤合私の系図よ貢とし七
おろこどもそのふのめく人傳ゆんどふ子にのまんと思ひもようゞ男姿で
変装そのふ武家にいさく彼地にもむきその妙薬を見にのまるゞ
古主へ帰京の程ともゆん始終を方の身をとそる雑薬人のとり
まきうの時を人を救ふ為を尚と来船を表せし親父の賜用ゆる時

ふ九州しそのふ所を北川の杜とのめく四方に紅をつけ梅を年ゞ年に
にいと細密よ呼ぶ名りを後年のこと繰如しまをゞと言をし元
「よくまをそうこもまくお考まるのでるのョさと母人をそんでるおまく
の羅刹よ絞くみをうかゆるゞ力を落しあさんョ「アイく」そまを
ゆまをのいをうふ考まを世うゞ紅ゞさんも母ゞ母のとどうも強
しのうまをまを人ゞどうゞ死ゞゞふ居くおうんをさいョ「ヲリく」よく父
ゆふのうもさをゞ業のゆうゆふ死ゞゞそよ居てうまをよとを情あ
い程ゆうしのふゆとゆてゆふくゆい私ゞんの滅ましさ考ゆを人よ
彼見とのめく道程をもしくゆ身のうくチト他くゆを云ゞくゞをゞも

他の十六七の婦ふたりとれ智恵才覚来世毎ごとに思ふ
ほど愚智なる
小野山峠とてこゝとどうぞと見ふ義度ふのやうもかゝ
ねばこゝとものごとに山大福アイタ〳〵ヨく世間なのてく〳〵ト例る
まぶうてくまる機者年今見わ者うく陽部の着も同年〳〵みバ何ゝ
も知ふ仕者知親とゝの親子ちらんうさも〳〵山節ゝりて毎お七ち
言ぐきてもこの男ゝく知ゆるこの者ゝりゝん漸ゝふ弱りのきこのこ者く
者ゝりゝるゞ源三夫婦を程迎けきバ日〳〵ふ者伝せゝ者どおしハ礼
きまゝるゝく問くあ自然合まゝるゞ長年の礼ゝ思ゝる者昨日今日まゞ貴
らまゝく男まゝりとゝるまゝる奉性も今ゝ何所〳〵ものゝひ者
ゝ

ゝりかゝ笑ゝまゝゞ死てゝのゝこ者ゝまゝゞと梅ゝ年ハゝく文ゝるゝゝりかゞく
孝行をゝんゝるものゝ源ふふ者ゝりけるゝゝりく〳〵程ゝ定業の河奉ゝりゝん泳生の
上旬彼岸さゝてふわゝゝ者くもゝゝと恨ゝゝく〳〵ゝ花七日ゝの夕暮の八相ゝ達
ゝゝ者ゝゝと散ゝゝく者ゝふゝゝ者ゝゝゝゝゝゝ梅ゝ年ハ清八ゝゝゝ母に
元ゝ者ゝ者ゝり動ゝ〳〵源の限ゝ源ゝく〳〵ゝ孝ゝの勉ゝ者ゝく〳〵に思ゝ者
ゝ八編述ゞゝ〳〵者ゝゞこの宝ゝ〳〵ゝく親〳〵者ゝ陽ゝく者ゝ
寝人ゝ者ゝ者ゝゞのゝ〳〵者ゝ者ゝゝゝゝゝゝ

[illegible]
[illegible]ゝが彼神宮屋の平左衛門支婦[illegible]こてゝ不[illegible]ひまゝく[illegible]代小者を[illegible]
[illegible]寄せ[illegible]き不[illegible]とゝちゞひ下[illegible]ゝ出く小源の者やも[illegible]紙[illegible]ゝ[illegible]こも伝切
[illegible]にまゝゝ[illegible]ひゝく此一件の物[illegible]今[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]源三に[illegible]ゝく
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

貞操婦女八賢誌 初編中